

新刊
紹介

For some in ancient books delight;
Others prefer what moderns write:
Now I should be extremely loth
Not to be thought expert in both.

河野 仁昭 著

『現代詩への愛』

(白川書院、A5判
四三二頁、九五〇円)

著者は本学の学生主事、人文科学研究所
兼担研究員であり、すでに、詩集「回帰」
「鎖事」等、また評論集「抒情の系譜」な
どの著書があるすぐれた詩人・評論家であ
る。

本書は、△戦後詩との邂逅のささやかな

体験を、できるだけ気取らず気張らずに、
ありのまま書いてみようと思いたった。

「引野収の詩」▽と著者がいう通り、日本
の戦後詩つまり現代詩について書かれたも
のである。また「あとがき」には、△戦中
世代でも戦後世代でもない、ひとりの平凡
なサラリーマンの内的な経歴を、できるか
ぎり虚飾なしにかいた：▽と述べてある
が、そこには謙遜があり、実は、読めば読
むほど、深い鑑賞と鋭い考察があり、論旨
は明快、文体も巧みで、まことに興味深く、
学ばされるところの多い好著である。

内容は、はじめに「現代詩人論ノート」
として、かなり長文の充実した鮎川信夫論、
黒田三郎論、原民喜論がある。続いて「現
代詩への愛」として、実に二十五詩人、大
木実、結城よしを、鮎川信夫、三好達治、
原民喜、清岡卓行、黒田喜夫、長沢延子、
堀田善衛、天野忠、石原吉郎、谷川俊太郎、
黒田三郎、吉野弘、石垣りん、茨木のり子、
高見順、伊藤整、大野新、引野収、清水昶、
岩田弘、中江俊夫、高野喜久雄、三木卓ら
の詩についての評論が連なる。

どの篇にも、著者と詩人及びその詩との、

直接間接のめぐり合いが、実に親しみのあ
る平易なタッチで書かれている。△三好達
治の「駱駝の瘤にまたがって」という詩集
を読みかえすと、あるいは、その中の幾篇
かの作品を思い出すと、それにオーバーラ
ップするように、敗戦直後の大阪の街と、そ
こでの一年ばかりの放浪生活の記憶が、妙
に生き生きと蘇ってくる。念のために調べ
てみると……「三好達治の詩」▽といった
調子の書き出しで、それから戦後の世態や
風俗を述べたり、詩の引用をしたり、思想
を述べたりして、論を進めて行くのだが、
思わず心ひかれて行くうちに、その詩人と
作品が、不思議なほどクッキリと浮びあが
ってくるのである。そして例えば八坂くは、
人間としての美しさにもまして、美しくあ
ろうとしてくじける人間の弱さにひかれ
る。高見が、「魂」つまり内的要請に忠実
に生きようとしながらくじけていった過程
を、批判がましく言おうとは思わなし、
その資格もない。むしろ、死にのぞんでな
お自己を問う真摯な態度に激しくうたれ
る。「高見順の詩」▽に見るように、著者
自身の切実な人間観や死生観(時には社会

観)を軸として評論しながら、そこにはつねに詩や人生に対する著者のこの上ないとおしみが一本貫いている。詩に対する大きな愛情を持つ者にしてはじめて見られる数々の深い思いがこめられている。

昔から「詩人を測るは詩人のみ」といわれているが、これはまさに人間を愛してやまぬ詩人の著者にしてこそ、ものし得た好詩論・詩人論であり、わが国戦後詩の理解に対する行きとどいた案内書ともいふべきである。むろん本書にまだ取りあげられていない戦後の優秀詩人がある。それらについての今後の執筆を大いに期待する。

(児玉実用・大学文学部教授・英文学概論)

エドワード・セガン著

末川博監修・薬師川虹一訳

『障害児の

治療と教育』

——精神薄弱とその

生理学的治療——

(ミネルヴァ書房、B5判)
(二五五頁、一、二〇〇円)

わが国の社会福祉の現状をみると理論研究と実践の結びつきが希薄で、一般的に福祉の基本的な心を忘れて現象を追いつく傾向があるのを否定できない。セガンのこの本は、そのような状態に対し、大きな反省への刺激を与え、研究と実践のあり方を教えてくれる。

セガン博士は(一八二一—一八八〇・フランス生まれ・一八四八年アメリカに渡る)医学者であったが、当時教育しても駄目だと考えられていた精神薄弱児の研究と教育に、その一生を捧げた。彼は、感覚機能の発達と知的能力の発達とは互いに関連する不可分のもので、感覚器官の訓練は同時に知的活動を開発すると考えた。つまり、いわゆる生理学的方法による教育を提唱したのである。この方法は、実際に大きな成果をあげ、フランスだけでなく、ヨーロッパ諸国でもアメリカでも高く評価されるに至った。本書は、第一章で「精神薄弱」について、その原因をはじめ諸々の角度からの分析を試みている。第二章が「生理学的教育」で、筋肉運動・諸感覚・話し方・読み方等々きわめて詳細具体的にその方法を説いてい

(57頁より)

お計りにて頒布してもらった。

一方、同志社本部としても同志社関係各方面にこの特別展示の開催を御連絡して、機会あれば見ていただくよう御案内につとめた。

かくして五月七日、総点数百六十点ほどのものを無事搬出、八・九の両日あらかじめ明治村の学芸室の方々と検討しておいた位置に飾り付け、東京博物館に長くおられた明治村副館長田内先生に、これはなかなか御馳走の展覧になるぞ、と最終的ダメを押していただいて五月十日のオープンを待ったのである。十日は茶会の初日として各地から人が集まられたのであるが、現地入りの住谷総長を、茶会々長谷川、明治村館長吉村、副館長田内の各氏他明治村役員各氏がお迎えくだされ、御挨拶、また御案内ありの一日であった。野点の席では新島襄にちなんで銘名した新作の茶盃の披露があったりした。

幸い、展覧会はなかなか好評をいただいたようで、これは各方面のお力添えによってであることを多謝し、明治村のこの展覧会御担当の皆様にはこちらの我ままをいろいろ通じていただき、とりわけ厚く御礼申し上げます。展示のパネル類は終了後同志社に御寄贈いただいたことを併せ誌して深甚の謝意を更に表する次第です。(竹内記)

る。第三章は「精神の治療」で、権威・命令・道徳・悦びと苦痛・社会化等を生理学的訓練との関連で具体的に説明している。第四章「施設」では建物と構造・生徒の組分け・職員等がどうあるべきかを丁寧に説いている。

百年以上の昔の書物ということで、用語の古さから、たとえば「精神薄弱児と癩症者との比較」の節などでは、原語自体の用法の区別がよく解らない部分もあり、適当な日本語に置きかえるのには大変な苦勞があったと思われる。それはともかくとして、新しいものに飛びつきがちの現在の研究者や実践家に、この古さが大きなパンチをくらわしてくれたいってよい。本書は障害児の療育の原点をはっきり示しているのである。障害児教育だけではない。すべての教育・福祉の原点を示しているともいえるのである。

最近わが国の福祉や教育の分野で強調されている「集団処遇」や「全障害児の養護学校入学」の問題などについても、この本は多くの示唆を与えてくれる。セガンは集団処遇の前段階としての個別処遇の必要性

や、子供の場合に於いての個別教育と集団教育の交互・併用の重要性を強調している。また、養護学校への入学のための準備の問題や家庭での教育と学校での教育の連繋の必要性を具体的に説いている。彼が一貫して述べているのは、生理学的療育の基礎は子供から信頼されることであり、それに欠かすことのできないのは愛情であるということである。「精神薄弱児を、自分の才能や学識のみで治療しようとする人には、聖

パウロの次の言葉の中に、自分の空しい独善性に対する評価を見出すことになるう。」(P二〇八)として、聖書コリント人への第一の手紙十三章「愛の章」を掲げている。とにかくセガンの理論は、血のにじむ実践があつて始めて導き出された研究成果であることを銘記しなければならない。

福祉にせよ、教育にせよ、その言葉がブームのように使われている昨今、本当の福祉とは何か、本当の教育とは何かを考えさせるものとして、この訳書を世に出していただいた磯氏、末川先生、薬師川先生に、同労の一人として感謝するとともに、一人でも多くの人にこの書を読んでいただきたい

いと願っている。

(大塚達雄・大学文学部教授・ケース・ワーク)

杉本峰子著

歌集

『尾灯』

(文京社出版、B6版)
(一八六頁、一、〇〇〇円)

著者は同志社大学総務部に勤務しておられる職員で、以前は図書館にも属していたというから同志社での職歴は古い。しかし古いのはむしろ歌歴の方で、著者はすでに終戦前後から作歌に携わっていて、最近これらの作品を一冊の本に纏められた。収めるところは昭和三十年以降昨年に至るまでの数百首で、逆年順に排列されている。

骨瓶の夫を抱きて京城の丘に立ちたる日は遠きかな

胸に合やす両手の爪の長く長く伸びて闘病の久しかりし夫

不幸にして戦病死した夫君を思うこのような作からはじまる歌を逆に見てゆくと、

現在に至るまでの著者の哀歎に満ちた半生が内面的に淡々と歌い継がれてきていることが知られる。一時流行の風を追わず、つましく順直に歌うこの著者の歌風によるのである。

生前に父の好みし柿若葉活けて百日早ゆかんとす

生前の衣類衣桁にかけてあり煙草の焦げもそのままにして

蛍光灯しらじら寒き夜更けにてマジックインキのきしむ音せり

眼をつむれば数字は烏合の衆に似て戦い合えり明日予算会議

若葉風すがしく吹ける屋過ぎの御苑の草に憩うか今日も

旅の夜に赤きじゅうたんの階くだる夜の湯の香のひそかなるとき

アルバイトの求人欄の掲示板に群る学生ら長髪不潔

ある部分学舎こわされていたるさま朝の途上に見つつ淋しき

受験生君ら緊張の面さむし警備さびしき校へ入り来て

腕章と胸のしるしに自らを縛られて入試監督者われら

受験生ら皆かえりたるキャンパスに反古紙ちれり夕光の中

機動車は帰りてゆきぬ夕近く入試おわりし後の開けさ

これらの作品は、とかく鬼面人を驚かそうとする近頃の歌壇の流行にわずらわされず、日常身辺の実生活を偽らず飾らず歌っている。集中の一部に少々の平俗さを混じえながらも、読者の共感を誘うものがある。著者は東京で発行されている短歌の結社「林間」に属し、その有力同人として、歌人としての将来が期待されている。筆者は京都歌人協会の一員として、また同志社に職をもつ一人としてのよしみから、勧められて紹介の筆をとった次第。短歌を詠みつづけてゆかれることによって、著者の今後の人生にさらに意義ある実を結ばれることを心から祈りたいものである。

(田中順二・女子大学教授・国文学)

グイン・ハウス

グイン・ハウスは、故 Alice E Gwinn 女史(Ⅱ写真Ⅱ元同志社理事・同志社中学校教員)の寄贈によるもので、このほど京都市左京区岩倉大鷲町五十三番地の一(同志社大学大成寮北隣)の現在地に移築された。

この建物は故人の遺志にそって、同志社大学が招へい、あるいは受け入れた客員教授、外国人研究員などのためのゲスト・ハウスとして使用されている。



Alice E Gwinn 女史